

ヨハンナ・シュピリ作
たかおまゆみ訳

ヤギ飼い少年 モニ 前半

モニ、歌う

フィデリス村にたどりつくには、ずいぶん遠く、ずいぶん高いところまで
のぼらなければなりません。馬たちも息があがってしまうので、最後はどう
したって歩くことになるのでした。けわしい登り坂が終わると、緑の丘の上
に小さな村が姿を現します。村に入れば、温泉まではもう少しでした。

ポソンとたたずむ温泉ホテルのあたりは、岩とモニの木ばかり。かわいら
しい高山植物が白や黄色の頭をそこかしこにのぞかせていなかったら、ひど
く物寂しいところに思えたことでしょう。

「岩とモニだけよ。ほかに何にもないわ」

大きな目をクリクリさせて、パウラがおばさんに話しかけました。体の弱
いパウラは、フィデリス温泉のそばに一軒だけある「温泉ホテル」へ療養に
来ていました。今もホテルから散歩に出てきたところでした。

「六週間もここにいるんだから、なんかほかに面白いものがあったもいいの
に」

「面白いといったってね、また落とし物をするようじゃ、面白いことも落っこ
としますよ」

おばさんにいわれるまでもありません。パウラときたら、小さなダイヤの
散りばめてあるペンダントをもう三回も落としているのです。亡くなったお
ばあさんからいただいた大事な形見なのに。

「あら？ おばさん、なにかこつちに来るみたい！」

パウラが耳を澄ますと、上の方から歌声が聞こえてきました。とちゅうにヨードルも入って愉快なことこのうえなしです。そちらに目をやってみるのですが、のぼったり、くだったりしている道なのでずっと見わたすことはできません。声はどんどんこっちにやってきました。

「見て、見て、おばさん！ ほら、あそこ！」

岩の突き出たところから、三匹、四匹、いえ、あたまがす頭数など知れぬほどのヤギがこっげんと姿をあらわし、あたり一面にカランカランと明るい音色が響きわたりました。ヤギたちが首につけている鐘の音です。ヤギたちのまんなかに男の子がいて、さも愉快そうに歌っていました。

寒い冬だって うれしいんだ

泣いても 何にもならないよ

岩の上には ほら いつも

あつたか春が すわってる

男の子はパウラたちに気がつくど、

「こんにちは！」

と行って通りすぎてゆきました。

「ちよ、ちよっと、まって。あなた、フィデリスのヤギ飼い？」

パウラはあわててたずねてみました。

「そうだよ」

「毎日、山に行くの？」

「もちろん！」

「名前は？ それにさっきの歌、もう一度聞かせてくれない？」

「モニっていうんだ。でも歌うひまはないな、ごめんよ。ヤギたちをうちに帰さなきゃならないからね」

そういうとモニは、ボロボロになった帽子をかぶり直して、

「ほーら、帰るよ、うちだよ！」

と細い枝を宙にふりならして、ヤギたちと走り出すのでした。

「ねえーっ、それじゃあ、あした歌ってくれる？」

後ろからパウラが大声で呼びかけると、モニはふりむいてうなずいてみせました。

モニは、「チビ」と「クロ」という温泉ホテルの主人のヤギもあずかっていた。チビはとても愛くるしく、モニと一番の仲良しでした。クロはモニのお母さんヤギです。

「さあ、チビ、疲れたろう？ ゆっくりお休み」

やさしくチビを抱き上げ、ホテルのうらにある小屋に入れると、クロも自分から中へ入りました。モニは自分の首に巻いた布を結び直すと、さらに道をくだっていきました。

村の広場につくと笛をふきならしました。すると家々から子どもたちが走ってきて、自分のうちのヤギを引き取ってゆきました。みんなが家へ入ってしまうと、モニは「チャイロ」を連れて、山の斜面にある、おばあさんと暮らす家に帰ってゆきました。

「うまくいったかい？ おなががすいたろうね」

おばあさんは夕食の支度をすませてモニを待っていました。とうもろこしのおかゆと、朝、チャイロからしぼったミルクです。

山でおきた出来事をおばあさんに話しながら、モニはおいしくいただきました。それからベッドに横たわると、吸い込まれるように眠りにおちていきました。

モニは一昨年おとしの夏からヤギ飼いの仕事をしています。モニのお母さんは亡くなり、お父さんは遠くへ仕事に行くといって出ていったきり、帰ってこないのです。

ですから、ものごころついてからこのかた、モニはおばあさんといっしょでした。おばあさんは貧しさのうちにありながらも娘の子どもを喜んで引き取り、正直に暮らしていました。

おばあさんは村のみなに好かれていましたので、一昨年おとし、ヤギを連れて山にゆく仕事をする「ヤギ飼い少年」がひとり必要とされたとき、だれもが「モ

二がいいよ」といつてくれたのです。モ二が少しでもお金をかせぐことができれば、祖母と孫の生活は楽になると考えたからです。

朝早くモ二を山に送り出すとき、おばあさんは必ずこういっていた。

「モ二や、山で危ないことに出くわしたら、すぐお祈りするのだよ。きつと神様が助けてくださるから。いつでもおまえを見ていてくださるからね」

だからモ二は、どんなに高い岩場でも、道の途中で雷が暴れても怖じ気づくことはありませんでした。

朝から晩まで心が鞠のように弾み、なんだかうれしくて歌わずにはいられない。モ二はそんな少年でした。

山の山

翌朝、歌声が聞こえたような気がしてパウラは早くに目ざめました。あわててとびおきて窓辺にかけよると やっぱり！ モ二でした。

赤いほっぺをつやつや光らせながら、温泉ホテルのヤギをちょうど連れ出すところでした。モ二が木の枝をしならすと、ヤギたちはうれしくてたまらずに、ピョーンピョーンととびはねます。歌声を響かせながら山に向かってゆくモ二を、こだまが背中から後押ししてくれるようでした。

空には朱い雲がたなびいています。生まれたばかりの新鮮な山の朝風がそよぎます。

あんまりにも気持ちがいいので、モ二は少し向こうの山に向かってとびきり大きな声でヨーデルをしました。ヨーデルというのは、アルプスの山々でヤギや牛を飼う子どもたちが、ふしをつけて裏声を出すものです。温泉ホテルの泊まり客がびつくりしてとび起きてしまったりの声でしたが、みんなもう慣れっこで、

「あと一眠りできるってことだな……」

と夢の中でむにゃむにゃつぶやきました。モ二はそれほどにまで朝早くヤギを集めていました。

高くのぼればのぼるほど空が青くなって、モニの歌声はますます弾みまし
た。

もみの木の中 ほら 向こうの上

小鳥たちが 声合わせ

こぬか雨が ふったけど

もう おひさまが ほほえんでる

春には 花咲き

黄色や朱色

空ときたら 青色で果てしなく

ああ、なんて素敵なんだ

夏には 野いちご ブルーベリー

手のひらからこぼれ落ち

赤や黒に手を染めて

ぼくときたら 食べるのにむちゅう

垣根の牧場 木の実がたわわ

ぼくには わかる いわずもがな

どこで ヤギが 喜ぶか

おいしい草が たんまりと

寒い冬だって うれしいんだ

泣いても 何にもならないよ

岩の上には ほら いつも

あったか春が すわってる

そうやって 岩の舞台 までたどりつきました。視界がひらけて遠くの谷
まで見わたすことのできる場所でした。突きだした岩があって、それを 岩

の舞台　とよんでいたのです。わきにはこじんまりした緑も広がっていて、ヤギたちはおいしく草をたべることができました。

モニは　舞台　のうえに身をなげだして、ひと休みしました。天はどこまでも青く、そびえる山脈やまなみのいただきに氷河が光り、深い緑に塗られた谷は朝日を受けてまぶしく輝いています。微風そよかぜは頬ほおをやさしくなで、モニが口笛を吹くのをやめると、鳥たちが今度はきそつてさえずりました。時々、チビがきて、甘えて鼻をこすりつけてゆきます。

ほかのヤギたちもめいめいモニのところに話をしにきたり、また草場にもどっていったりしました。

チャイロは、「どうだい、うまくいってるかい？」というふうに寄ってきてますし、若いシロとすばしこいツバメは、モニにちょっかいをだします。気位きぐらいが高いチビの母のクロは鼻をならし、大きなサルタンは「おれがみんなを守ってやってるんだぞ」という顔です。

光のあふれた午前中がすぎ、モニはかんたんなお昼ごはんを食べると立ち上がって、さて、今日はもう少しのぼつてみようと考えました。

どうやってのぼつて行くか少し迷いましたが、左手の方に行くことにしました。そっちを行くと、三つの岩からなる　竜岩　があり、そのまわりにはとびきり柔らかな草が生えているのです。

ただ、そこまではかなりけわしい道がつづき、切り立った岩の壁には危ないところもありました。でもモニはよい足場を知っていましたし、ヤギたちもおいしい草場に行くとかわかっていたので、モニの後を一行になって、右に左にからだをゆらしながらも、おとなしく急斜面をのぼりました。あまりにも斜面がきついところでは、モニがチビを肩にかつぎました。

めざす草場につくと、みな飲んでいっせいなきはじめたほどです。

「ここはけわしいから、押し合ったらだめだよ。

おっと、ツバメ。おまえ、何をしようっていうんだい？」

モニはそついいながら、岩にかけのぼりました。すばしこいツバメは、もつと上の　竜岩　によじのぼつて、「ふぶん」といってモニを見下ろしていました。モニもツバメと同じくらい身軽です。よじのぼつていって、さつとツ

バメの足をつかむと下までつれおろしました。そしてツバメが、もう二度と上にのぼる気をおこさなくなるまで、その足を離しませんでした。

そうこうしているうちに時間が経ちました。ふとみると、クロがあたりを見回しているのが目に入りました。

「……？ あっ、チビがないんだ！」

すぐにモニは気づきました。チビはモニのそばか、クロのそばにいるに決まっていたからです。

その時です。下の方から哀しそうな声がかすかに聞こえてきました。おなかを地面につけて、はいつくばって見下ろすと、岩から突き出した大きな枝にチビがひっかかって、シクシク泣いているのが見えました。

なんとということでしょう！ でも、がけ下に転がり落ちていても不思議はなかったはずです。幸運にもチビは大枝にひっかかっていました。

「しっかり！ いい、ぎゅっとつかまっているんだよ、チビ！
すぐにおまえのところに行くからね」

でもどうやって……？ ここからおりるにはあまりに急なのです。

そうだ、雨岩 までおりて、そこからよじのぼればいいんだ！

そう思いついたモニは、急いでヤギたちを集めて△雨岩▽まで下りました。

そこはその名のとおり、昔からヤギ飼いの子どもたちが、悪天候の日に雨やどりをする場所で、上が平たくて、中に大きな空洞がある岩場でした。

モニは、群れが草を食べはじめたのを見届けると、雨岩 から思い切った上にはいのぼって行きました。上の岩からつきだした大枝のところにチビが見えます。チビをかついでここをはい降りてくるのは至難しなんのわざに思えました。

「ああ、お空の神様、どうか、どうかチビを助けることができますように」
モニは心のなかでそう祈りました。するとおばあさんのいったとおりでした。なんともいえない不思議な感じ、「だいじょうぶ、帰ってこられる」という気持ちかひたひたと押し寄せてきました。

そして数分後、チビを肩にかついで、モニは再び緑の草場に立っ

たのです！

どんなに危険なところだったことでしょう、そして、どんなに鮮やかにそこから救い出されたことでしょう！ チビはまだブルブルふるえ、モニの胸深くに体をうずめるばかりでした。

夕方になって、パウラはホテルの入り口でモニのことを待ちわびていました。

モニは今日ばかりはパウラのところで足を止めました。そして、山での出来事をすっかり打ち明けました。聞くパウラの心も小舟のように揺れました。そして、チビの細い白い足をさすり、背中黒い毛をなでてやりました。

その日、パウラはおばさんからようやくとお許しをもらっていました。モニについて村まで降りていいといわれたのです。だってパウラはモニの「喜びの歌」を、どうしても最後の最後まで聞きたかったのです。

訪問者、あらわる

その夏は美しい日がどこまでも続きました。朝から晩まで空に雲ひとつなく、モニの喜びの歌声が澄みわたって、朝な夕なにこだましました。温泉で療養をしているお客さんたちもすっかり耳慣れて、いつのまにやら、みんなして歌声を心待ちにしていました。パウラも、夕方にモニの朗らかな声を聞くことが何よりの楽しみでした。

その日モニは、また 竜岩 までのぼりました。この前はチビのことで、ヤギたちが充分に柔らかい草を食べられなかったからです。きょうはチビをしっかり抱きかかえたまま過ごしました。

とびきりおいしそうな草をちぎっては手でチビの口に運んでやると、チビはかわいい頭をモニにこすりつけてメーとなきました。

そんなふうに行っていると、下の方から何やらやってくる気配がしました。だしぬけにあらわれた人間の顔は、モニのよく見知っているものでした。

「おっどろいたなあ、おまえがこんなに高くまでのぼってるなんて！」

と、その顔にくつついて口が声を出しました。それはキュルビスに住むエルグリでした。

「いつもはこんなに上までこないんだけどね」

突然に目の前に現れたエルグリに仰天したのは、モニも同じです。

「エルグリこそ、どうして、こんなとこまで？」

「おまえに会えるかもって思ってた。それに、ほら、うちのこのヤギ。この二匹を温泉ホテルの主人に見せる用もあったんだ。主人は、ヤギを一匹買いたがってるからさ」

「そのヤギ、エルグリが飼っているヤギなの？」

「そうさ、うちのだ。ヤギ飼いの仕事は、もう辞めた」

それを聞いて、モニは二度ぎょうてんしました。なぜなら、モニとエルグリは同じところにヤギ飼いの仕事を始めたのです。エルグリはキュルビス村のヤギ飼いとして今も働いているとばかりモニは思っていました。それにヤギ飼いをやめたというのに、ちつとも悲しそうじゃないのです。モニにはそれが信じられないことでした。

「それで、今、何してるの？」

「卵売り。毎日、卵を持って、一軒一軒、売り歩いてるんだ」

「そんなのつまらなくないかい？ ヤギ飼いの方が千倍も楽しいだろ？」

「なんでだ？」

「だって、卵は動かないじゃないか。話しかけても返事もしないしさ。あと、も追いかけてこないし、喜んでくれないし。卵ってのは、そもそもなついたりしないだろう」

「そりゃ、そうだけどね、モニ。その喜びのために、おまえ今も六回、立ち上がったんだぜ。しょうもないチビヤギを止めようとしてたり、落ちないようにするためにな。そういうのって喜びか？」

「立ったり、追いかけたり、そんなの別にたいしたことじゃないさ。ね、チビ！」

「そのチビヤギをさ、うまいこと引きとめておく方法もあるんだぜ」

「どんなふうにな？」

「地面に棒をしっかりと立てて、そこにヤギの片足をゆわえつける。メーメー

うるさくいうけど、どこにもゆけないってもんさ」

「エルグリ……！」

モニは腹がたつてきました。ぼくがチビを守ってあげなきゃ、という気分でした。

「まあ、そのことでそんなに心配しなくてもいいさ。そのチビがおまえといっしょに山に来られるのも、あとわずかだからな」

「は？」

「あと、わずかつ、ていったんだよ」

モニは思わず立ち上がりました。

「えっ？ どういうこと？」

「へえ、おまえ知らないんだ。そいつの主人は、もうそいつを飼う気がないときた。かよわずぎて、大きくなっても仕事しそうにないからな。それで主人は、ぼくの父さんにそいつを売ろうとしたんだけど、父さんも断った。となりや、ただ飯をくわせるわけにはいかないだろ。主人は近いうちにそいつを始末するらしいよ。そのかわり、うちの まだらヤギ を買う気なんだ」

あまりの話に、モニは呆然としてしまいました。

「そ、そんなバカな！ まさか！」

そんな、おまえを殺すなんて……。おまえが殺されるなんて！ そんなことになったら、ぼくも死んじゃうよ……。

「そんなのウソだろ？」

大声をあげるモニの目からは涙があふれそうでした。

「そんなにわめくなよ」

エルグリは、うるさいなあという顔をしました。

「さあ、立てよ。わかるだろう？ そのチビが主人のもので、おまえのものじゃないってこと。主人がしたいようにしていいに決まってるじゃないか。さ、もう考えるのよせよ。もうひとつ、うまい話があるんだぜ。そうら、これを見てくれよ」

そういうとエルグリは片手をモニにさし出しました。けれど、もう片方の手でパツとその上に蓋ふたをしたのです。蓋ふたをしたのにもかかわらず、なにかが

その瞬間しゅんかんからでした。モニの心の苦しい戦いがはじまったのは。もし、エルグリの手の中にあつた燦めくペンダントのことを誰にもいわなければ、チビは殺されずにすむのです。ペンダントにはたくさんの石がうめこまれ、ひとつひとつが変幻自在へんげんざいに輝いていました。きっとよほど高価なものだということは、誰にいわれなくてもわかりました。でも、かたや、愛くるしいチビが殺されてしまうのです。もし、モニがペンダントのことをホテルの主人に教えたら……！

モニは、チビを選ぶしかありませんでした。チビは何も知らずに、モニに今もからだをあずけていました。

「いいよ、そうしよう、エルグリ……」

モニは力なく答えました。

「よし、決まった！」

エルグリは、モニの手をとるとしっかりと握手して約束を確かめました。そうして山を降りてゆきました。

話をしている間、ヤギたちがもめていたことも二人は知らないままでした。キュルビスのヤギは、二頭のヤギが同じところでエサをさがしてはならないことや、少なくとも押しつけあってはいけないことをわかっていませんでしたし、フィデリスのヤギは、訪問者があつた時に、おとなしくしなければいけないことなど教わつたことがなかったからです。

モニは、エルグリがいつてしまったしばらくあとにヤギたちと家路につきましたが、長い道のりの間、押し黙つたまま、一度も歌わず、一度も口笛をふきませんでした。

(後半へ続く)